

札幌・大田～姉妹提携への道～

札幌市国際部交流課

交流の契機

札幌市では、これまで米国・ポートランド市、ドイツ・ミュンヘン市、中国・瀋陽市、ロシア・ノボシビルスク市と姉妹友好都市の提携を行い、4都市との幅広い交流を通して相互理解と友好を深めるとともに、姉妹友好都市を窓口それぞれの国の多くの都市と経済や文化など都市の特徴に合わせた交流を積極的に推進してきました。

近年、中国・韓国を中心とした東アジア地域との交流の重要性が増す中、韓国の都市との交流も増加し、姉妹都市提携の気運が高まりつつありました。

2003年6月、札幌市の姉妹都市であるロシア・ノボシビルスク市の開基110周年記念事業出席のため、ノボシビルスク市を訪問した札幌市の副市長と、同じく記念事業に出席していた韓国大田広域市の市長が会談を行い、その中で大田市長から札幌市との姉妹都市提携が提案されました。

大田市は、大韓民国の中心部に位置する人口約150万人の都市で、ソウルからKTX（韓国高速鉄道）で1時間ほどの距離にあり、韓国一の「科学技術都市」として発展を続ける都市です。市内には宇宙開発や生命工学、電子などの政府や民間の研究機関が集積し「韓国のシリコンバレー」と呼ばれています。

交流の進展

大田市の提案を受け、札幌市は大田市との友好と相互理解を深めるためさまざまな交流に取り組んできました。(財)札幌国際プラザを中心に「韓国を知るセミナー」の開催や、将来の両市の交流を担う若い世代を育成するため、大田市との間で青少年を中心とした交流事業を実施しました。例えば、中高校生を対象にした「札幌・大田未来プロジェクト」による相互訪問、両市の大学生の協働による「札幌PR映像制作事業」、大学生国際合宿セミナーなどを



大学生国際合宿セミナー

実施しました。

その後、両市の市民団体が姉妹団体の提携を行うなど、姉妹都市交流を支える市民同士の交流が着実に広がってきました。また、2004年2月には、IT関連の企業間交流を促進するため覚書の調印を行うなど、経済交流も進んでいます。

こうした交流を積み重ねる中で、札幌市では姉妹提携の気運が徐々に盛り上がりを見せ、市民や関係団体から大田広域市との姉妹都市提携の早期実現を求める要望書が提出されました。

2009年8月には、大田市の国際交流担当職員が札幌市を訪問し、今後の交流について意見交換を行い、姉妹都市提携の気運醸成のため、双方の都市においてお互いの都市をPRすることなどが話し合われました。その結果、2010年2月の「札幌雪まつり」に大田市の公式訪問団が来札し、雪まつり会場に大田市PRブースを設け、会場を訪れた市民に向けて大田市の魅力を紹介しました。また、別会場では市民向けの「大田広域市を知るセミナー」を開催し、参加した多くの市民に大田市を紹介するとともに、同時に開催された交流会では、訪問団が持参した韓国茶と韓国スイーツを味わいながら大いに盛り上がりました。

また、札幌市からも2010年5月に札幌市の副市長を団長とする訪問団が大田市を訪問、大田市役所ロビーにおいて札幌のパネル展を開催し、あわせて来

場した多くの大田市民に「さっぽろスイーツ」を配布するなど札幌の魅力が大田市民にアピールしました。

姉妹都市の調印

こうした事業の積み重ねと、駐札幌大韓民国総領事館の積極的な後押しもあり、大田市では2010年7月の市議会において「大田広域市と札幌市の姉妹都市提携の決議」が採択されました。

その後、札幌市長を団長とする札幌市友好訪問団が大田市を訪問し、両市長が「姉妹都市提携に向けた覚書」に署名し、両市の早期の姉妹都市提携の意向を確認しあうとともに、姉妹校の提携や動物交換、コンベンションビューロー同士の提携など今後の交流について意見交換や確認を行いました。

札幌市は韓国の多くの都市と交流を進める中で、大田広域市が札幌市と同じく韓国国内で5番目の規模であること、IT等情報産業が発展し、首都機能の一部が移転した忠清道地域の中心的都市であることなど、当市と都市の規模や歴史、産業構造が類似していることから、市にとってまちづくりにつながる有益な交流を進めることができると考えました。

また、これまで幅広い分野において相当な交流実績があり、市民の賛同を得やすいことなどから、札幌市においても2010年9月の第3回定例市議会で、全議員提出による「姉妹都市提携の決議」が採択されました。

これを受けて、2010年10月20日、ヨム・ホンチョル大田広域市長を団長とする大田市提携記念訪問団



未来プロジェクト

総勢55名が姉妹都市提携のため札幌市を訪問しました。滞在中の10月22日に提携調印式を行い、札幌市にとって20年ぶり、5番目の姉妹都市の誕生となりました。

札幌市と大田広域市は、市民の力で日韓の不幸な過去を乗り越え、新たな歴史を築いていくことを願い、日韓両国関係の発展とアジアの安定と繁栄、ひいては世界の平和に寄与することを高らかに謳い、両市市民の友好の証しとして姉妹都市の盟約書に調印しました。

提携記念式典に前後して記念植樹や祝賀会、姉妹校提携や関係団体同士の交流覚書の調印を行いました。さらに、両市の動物園による提携記念の動物交換として、札幌市からはリスザル8頭が、大田市からはプチハイエナのカップルが贈られました。

提携後の交流

札幌市では姉妹都市の交流は、市民主体の幅広い分野の交流を進めることが重要であると考えています。日本と韓国とは直行便でわずか3時間という距離的近さを生かした交流を進めていきたいと考えています。例えば、ジュニアスポーツ交流や姉妹校交流、大学間交流など若い世代の相互訪問を積極的に進め、両市の次代を担う人材を育てていきます。

また、実務型交流の充実も重要です。姉妹都市交流は相互理解と友好増進に重点が置かれていますが、最近はそのそれぞれの都市のまちづくりにつながる交流も求められています。これまでの人と人の交流を軸として、コンベンションや観光客の誘致など経済効果のある分野の交流も展開してまいります。



姉妹提携調印式（2010年10月22日：札幌市）



姉妹提携記念バナー

市・大学・国際交流協会の3者協働による 姉妹都市オーストラリア・ウーロンゴン市からの 日本語研修生受け入れについて

川崎市総務局交流推進課 平井 和美

ウーロンゴン市は、シドニーの南約80kmに位置するオーストラリア東岸ニュー・サウス・ウェールズ州の都市です。人口は約20万人で、古くは川崎市と同じく鉄鋼をはじめとした重工業で栄えましたが、近年は情報産業や、温暖な気候や美しいビーチなどを活かした観光産業など、新たな産業にシフトしてきています。

本市とウーロンゴン市は、1988年に姉妹都市提携を締結して以来、教育・文化など多方面にわたる交流を続けてきました。提携20周年を迎えた2008年には、両市の代表団が相互訪問するとともに、川崎市の文化交流団が現地で能楽の公演を行い、ウーロンゴン市からは若手ピアニストが来日し川崎でコンサートを行うなど、近年も活発な交流が続いています。

22年にわたる交流の歴史の中でも、ウーロンゴン市の教育の中心である国立ウーロンゴン大学（学生数約2万6千人）の日本語履修生による「川崎研修」は、1992年の開始以来途切れることなく、今年度までに283名もの学生を受け入れてきました。

研修の概要

この研修は、ウーロンゴン大学で日本語を専攻又は副専攻している15人程度の学生が、毎年6月半ばから約3週間川崎市を訪れ、日本語の授業を受けながら、市内の家庭へのホームステイ、学校や老人ホーム訪問、本市の「インターナショナル・フェスティバル」への参加など多彩なプログラムを経験するものです。ウーロンゴン大学では、この研修を日本語の課程を修了するための必須要件としており、特別な事情がない限り、同大学で日本語を学ぶ学生は、川崎研修を経験することになります。

当初は市単独プログラムとしてスタート

1992年の開始から2004年までは、本市単独のプロ

グラムとして受け入れを行い、市が連絡調整や視察先の手配を行うとともに、財団法人川崎市国際交流協会が日本語講座の実施やホームステイの手配などを行ってきました。その後、それまで本市からの依頼により、この研修のために市内多摩区の生田校舎で討論会等の交流行事を実施してきた専修大学が、この交流行事の積み重ねをきっかけとして、2005年にウーロンゴン大学と国際交流協定校の協定を締結しました。

この協定により、専修大学の交換留学プログラムの一環として、ウーロンゴン大学生向けに特別に開発した3週間の「日本語・日本事情プログラム」が、毎夏、同大学の生田校舎で開催されることとなりました。

3者の協働事業として

こうして、ウーロンゴン大学生の「川崎研修」は、本市と専修大学、そして(財)川崎市国際交流協会が、それぞれの特色を活かしながら3者協働で実施する事業となりました。では、実施にあたっての3者の役割分担と、プログラムの概要を紹介したいと思います。

まず川崎市（交流推進課）は、プログラム全般の



川崎市市長表敬、緊張しながらの自己紹介



小学生から日本の遊びを教わる

調整、現地大学担当者との連絡、川崎市長の表敬訪問や市役所主催の歓迎昼食会、市内のフィールドトリップなどを実施します。市長表敬訪

問では、改まった雰囲気の中で学生がひとりずつ日本語で自己紹介を行うことが恒例となっており、フォーマルな場での日本語をなかなか経験することのない学生たちには貴重な経験となっています。併せて、市内の特別養護老人ホームや小学校の訪問も毎年行っており、お年寄りや小学生といった幅広い年齢層の市民と日本語での交流の機会を持つことができます。

また、毎年7月初旬に川崎市国際交流センターで開催される「インターナショナル・フェスティバル in カワサキ」では、ウーロンゴン大学生によるオーストラリアやウーロンゴンの紹介ブースが設けられ、フェスティバルを訪れた市民にプレゼンテーションや歌の披露が行われます。

次に、専修大学の役割は、前述した「日本語・日本事情プログラム」への学生の受入れです。このプログラムは、「日本事情」という名前が示すとおり、日本語だけでなく日本の社会・文化についても学べる内容となっており、世界各国から多くの留学生を受け入れている専修大学ならではのノウハウが活かされたものです。プログラム期間中には歓迎会や歌舞伎鑑賞、さまざまな交流イベントが開催されるとともに、研修の最終日にはプログラムの集大成として成果発表会が開催され、学生たちはホストファミリーや研修関係者の聴衆を前にひとりずつ日本語でスピーチを行います。また、希望する学生には専修大学生から日本語の日常会話の勉強を手伝うカンパセーション・パートナーがつき、授業時間外にも学生同士の交流を活発に行うことができます。

最後に(財)川崎市国際交流協会は、研修の中でも特に参加者からの評価が高い市内家庭へのホームステイのコーディネートを行っています。ホストファミリーは、国際交流協会にホームステイ・ボランティア



インターナショナル・フェスティバルでウーロンゴン市を紹介

の登録をしている家庭に周知されるとともに、協会ウェブサイトや市広報誌で募集が行われ、ほぼ毎年受入希望家庭数が募集家庭数を大幅に上回るという人気です。お互いの文化や生活習慣の違いを理解しながら、2週間ホストファミリーと過ごす経験は、大学での授業とともに、日本語能力を格段に向上させるための貴重な経験となっています。研修の最終日には、川崎市国際交流センターで「さよならパーティー」が開催され、パーティーの最後には毎年涙ながらに別れを惜しむ学生たちとホストファミリー、そして専修大学生たちの姿が見られます。

3者協働の成果

このように、市・大学・国際交流協会の3者が一丸となって受入れを行うことで、日本語を学ぶ学生たちにとって多様性に富んだプログラムを提供することができ、学生からのアンケート結果を見ても毎年大変有意義なプログラムであったとの評価を受けています。また、ホームステイ、老人ホームや学校訪問、「インターナショナル・フェスティバル」参加といった川崎市民と交流する機会も多く設けられており、市民交流の観点からもとても貴重な事業だといえます。過去の参加者の中には、川崎研修の後、改めて専修大学の長期交換留学生として来日をしたり、卒業後JETプログラムを利用して国際交流員として川崎市役所に勤務をしたりというように、再び川崎を訪れる学生が何人もいます。この研修を通して、姉妹都市で日本語を学ぶ若者たちに川崎市やそこに住む市民の魅力を知っていただくことは、将来の両市の友好にとって、何より大きな財産になると確信しています。